



CIF JAPAN

NEWSLETTER No.37

http://cif-japan.papnet.jp/
cifjapan08@gmail.com

Council of International Fellowship Japan

発行人 NPO 法人 CIF ジャパン 理事長 坂本 正路

編集人 坂岡 隆司 発行日 2017 年 8 月 1 日

事務局 〒607-8216

京都市山科区勸修寺東出町 75 からしだね館

TEL 075-574-2800 Fax 075-574-0025

第2回国際研修を 成功させましょう

理事長 坂本 正路

今年度は I P E P (国際研修) の実施の年に当たります。昨年末から各国 C I F の支部に対して参加者の募集をしたところ、4 月末日の応募者は 14 名に至りました。それを受けまして 5 月 20 日からしだね館での選考委員会において公平な審査の結果、募集人員は 3 名でしたが、エストニア、オランダ、アメリカ、タイの 4 名の方を選考いたしました。それは財政的には厳しいが、応募者の熱意に答えたいという思いと、アジアの方の参加を実現したいという思いからでした。

おもな研修場所は京都ですが、タイからのヴィサさんの現場研修を大分県の別府においても行うことが出来る事になりました。このために協力を申し出てくださった江口敏一さんにお礼申し上げます。

同日に行われました理事会と総会において今年度の活動計画も承認され、実施に向かっております。

総会のあと、前理事長故竹内和利様への感謝状贈呈式を営みました。竹内さんは C I F ジャパンの N P O 法人化に多大の努力をされてそれを実現し、さらに I P E P の実現に奔走されて 2015 年にそれをやり遂げられました。竹内さんの努力があったからこそ 2 つの大きな事業が貫徹できたものと思います。

感謝状贈呈式には圭子夫人がご出席くださり、それを受け取っていただきました。



後列：左より、加納、浅野、佐野、菅蕉、坂岡、ナンディ藤本
前列：左より、梶村、竹内夫人、坂本 (敬称略)

さて、10月のIPEPの実施に向かって本格的な準備をすすめるにはなりません。今回は行動力、英語力に優れた竹内さんを欠いている中での実施ですから英語対応と計画・実施面に大いに不安があります。しかし、会員一同の理解と協力、また外部の方々のご理解とご協力を得て実施いたしたいと思っております。

○研修生の実習、移動の際の付き添い支援

○観光などの際の案内

○資料作成の作業

○研修内容充実のための寄付

以上のような様々な支援方法がありますのでよろしく
お願い申し上げます。

総会、理事会のご報告 ～予算変更について～

2017年5月20日(土)、理事会、総会が、法人事務所のある「からしだね館」(京都市)で開催されました。また、理事会に先立って、今回のIPEP17の参加者選考会が行われ、申込者14名の中から、4名が選考決定され、理事会で承認、総会で報告されました。

理事会、総会における協議により、IPEP研修参加者を1名増員したことに伴い、IPEP関係の予算を原案の総額83万円から10万円増額の93万円とする事となりました。それに伴い予算書も別頁のように修正することとなりましたので、皆様には、修正した予算書に差し替えていただくようお願いします。

その他、各議案については、基本的に原案通り承認されました。総会出席者(敬称略):坂本正路、梶村慎吾、浅野純江、坂岡隆司、加納光子、菅蕉寂泉、上利久芳、藤本幸子、佐野富子、以上9名。欠席者のうち委任状又は書面表決書提出者14名。合計23名。他に、IPEPに関するオブザーバーとして、横田喜美子氏が出席。



研修報告



工藤仕登

私は、今年の5月、CIPシカゴの協力を得て、シカゴ市内から電車で20分ほど離れた

Oak Park という地域にある、Oak Leyden という障害福祉サービス事業所にて約4週間の研修を受けました。その間、UIP/Seguin という同じサービス形態の事業所や Southside Occupational Academy High School という高校卒業後、22歳になるまでの障害児者に就労のトレーニングを専門に行う学校でも研修をしました。

研修の内容は主に、日本のサービス管理責任者にあたる Qualified Intellectual Disabilities Professional (以下 QIDP)からの支援計画や実践の説明を受け、一緒に活動に参加することでした。イリノイ州のサービス事業所で作られる支援計画は、Person Centered Planning(本人を中心とした計画作り。以下 PCP)の考え方に基いて作成されています。研修を通じてそのポイントとして以下の3つがあるのだと学びました。

①意思決定の仕組み

言葉での意思表示が難しい利用者

言葉での意思表示が難しい利用者の場合、どうしても代行決定に頼らざるを得ません。事業所・後見人・コーディネーターが互いにけん制し合い、事業所や家族の意見に偏ることが防がれ、利用者の「最善の利益」はどういったことであるのか話し合われている。加えて、生活支援員が必ず会議に出席することで普段の利用者の思いを補足、代弁し利用者の意思の尊重を支えている。

意思表示が可能な利用者

PCPの手法の中の一つである PATH (希望ある新しい明日への計画づくり)の作成過程では、本人が会議に出席する人を選び、場所も選んでいました。そのことによって、自分の思いを表明しやすくなるし、計画の主人公は自分自身であることへの意識を高める。意思決定は他者との関係性や物理的環境からも影響を受ける。信頼関係が構築された支援者の出席と、会議の場は慣れた場所が望ましく、意思表示がしやすい環境づくりを大切にしていました。

②最も制約の少ない環境での生活を目指す

合同研修も含めて、PCPは最も制約の少ない環境の下で実践されるということを学びました。つまり地域での実践が基本です。入所施設では生活への自己決定の制約が多く、支援者の都合が優先されてしまう傾向にあります。「自立」に力を入れていたのは、可能な

限り自分で自分の身の回りのことをできるようになることで、支援者の有無や都合に左右されずに行動できる。それが本人中心につながることも説明がありました。安易に支援者に頼る事でかえって本人の生活に制限が増えるという。また、行動障害に対して専門家の指示のもと改善に取り組むことで、障害の重さを理由とした入所施設への移行を可能な限り防ぎ、より制限の少ない地域での生活、つまり、グループホームや一人暮らしを支える役割を意識して支援にあたっている姿勢がうかがえました。

③夢や目標への支援

一見実現不可能にも思えることであっても、一歩一歩近づく道を探し、より具体的な案を提示して実現可能な目標として設定していました。たとえば「アナウンサーになりたい」という夢を持つ知的障がい者に遭遇しました。どうしてアナウンサーになりたいか聞いていくと、人前で話をして聴いてもらうことが好きということでした。いきなりアナウンサーになることは難しいが、動画サイトに自分のレポート動画を投稿することでも良いということで、そこから始め、テレビ局でのボランティアに参加することにもなっていました。働くことだけに注目した支援計画ではなく、本人が抱く夢を大切に、利用者の人生が豊かになるような支援計画が作成されていました。

また、日中活動を提供する中で、PCPの目標の一つでもある地域に所属し参加するということに対して、UIP/SeguinではCommunity Connection Program(地域でボランティアをしながら、就労に必要な技術を身につけるためのプログラム)を通じて積極的に地域参加の機会の提供を行っていました。その結果、一般就労の実現だけでなく、施設での限られた人との関わりを超え、地域の住民との交流が深まり人間としてのあるべき生活を実現していました。



障害者権利条約が批准され、その中で意思決定支援が注目を浴びています。本人を中心とした支援を構築するための重要な要素なのだと感じ

ました。また、入所施設よりグループホーム、そして一人暮らしと自己決定に制約の少ない地域での生活をイリノイ州では目指していました。地域での支援の実践が当たり前になってきています。今回の研修では、支援者としての基本的な心構え、姿勢を改めて確認できたように思います。色々な援助技術はありますが、この「本人中心」という考えがあつてこそ、生きてくると思います。

(三重県・生活介護事業所・相談支援事業所かすみ草・管理者)

第2回 IPEP 参加者の横顔

①コニー・アルスプールさん (オランダ)

CONNIE AALSVOORT

ソーシャルワーカー。1964年生まれ。ナイメーヘン大学で文化人類学を修める。2006~2009年高齢分野のソーシャルワーカー。1991~2006 難民問題にコーディネーターとして取り組む。現在、スウォン・シニアネットワークのスタッフ。高齢者の在宅福祉に取り組む。特に多文化圏から移住してきた高齢者のソーシャルワーク。高齢者(特に多文化圏からの)ケアについて関心あり。介護ロボットなどにも。

②フレデリック・ペンスさん (米国)

FREDERICK PENCE

認定ソーシャルワーカー。1976年生まれ。インディアナ大学でソーシャルワークを学ぶ。修士。フィラデルフィア高齢者サービス提供機関(非営利)で、サービスコーディネーターとして働いている。地域の貧困高齢者の様々な課題に取り組む。在宅高齢者の実態、アセスメントと評価方法などに関心あり。

③ジャーナ・キカスさん (エストニア)

JAANA KIKAS

人材管理担当者。1972年生まれ。職員1300人規模の病院で、人材管理の担当者(Human Resource Manager)として働いている。Tartu 大学で経済学、経営学を修める。障害をもつ求職者や従業員のカウンセリングなども行う。職業教育、メンタルヘルスケア、精神障害者の就労センターなどに関心あり。

④ヴィサ・スエブペッチさん (タイ)

VISA SUEBPETCH

ソーシャルワーカー。1987年生まれ。タマサート大学で社会福祉を学ぶ。現在、マヒドール大学シリライ薬事学校における心理精神症状のある児童青少年を対象とした分野で、ソーシャルワーカーとして働いている。虐待、暴力等による問題を持つ児童青少年問題に取り組む。養子縁組、児童養護関係の機関とも連携。バンコク難民センターでプログラムソーシャルワーカーとして活動した経験あり。ニックネームはNattie。

本番に向けて準備作業が進んでいます。

第1回準備会が、2017年7月8日(土)行われました。

○前回到続き、同志社大学木原教室の協力が得られることになりました。

○実習地2か所が決まりました。

Jaana Kikas → 「からしだね館」(京都)

Visa Suebpetch → 「栄光園」(大分・別府)

Jaana は、前回の Georg Dester に続いて、障害福祉

専門のからしだね館(CIF 坂岡会員が理事長)で受けていただくことになりました。また、Visa は、児童養護施設として経験豊富な栄光園(CIF 江口会員が施設長)で、今回初めて受けていただきます。

○あと2名、Cony と Frederick の実習地については、現在調整中です。

IPEP 寄付のお願い

CIF ジャパンによる第2回 IPEP が10月に開かれ、海外の4か国から4名の研修生を受け入れます。現在、そのための準備に追われておりますが、資金面でもご支援をよろしくお願いいたします。

なお、年会費納入100%も目指しておりますので、まずはこれにご協力願います。

<< 2017年度会費納入ご協力のお願い >>

新年度の会費の納入をお願いいたします。また、昨年度の会費が未納の会員各位には併せて納入をお願いいたします。(年会費 3000円)

郵便振替口座 番号 00270-4-54121

加入者名 CIF ジャパン

銀行口座 三井住友銀行 八王子支店

(店番号 843) (普)7815136

口座名義 CIF ジャパン出納責任者梶村慎吾

■お知らせ

本年5月、CIPUSA(米国)研修に参加された工藤壮登氏の研修報告講演会を下記の通り行います。

(併せて今回の IPEP の簡単な報告も予定)

是非ご参加ください。

2017年11月25日(土)午後2時~4時

於) からしだね館(CIF ジャパン事務所所在地)

《編集後記》

暑中お見舞い申し上げます。九州北部、秋田、佐渡など、各地の豪雨で被災された方々にお見舞い申し上げますと共に、速やかな復興をお祈りいたします。

5月の総会には、はるばるインドからナンディ藤本幸子さんも参加してくださいました。感謝。10月の IPEP まであと2か月。事務局では準備に追われておりますが、成功のカギは、何と言っても会員の皆様のご協力です。何卒よろしくお願いいたします。(坂岡)